あつし塾長の

子のやる気 親の気づき

○○48

第3章・ゆとり教育世代の見えない学力

進路選択は15歳の船出

家庭を〝母港〟に外で活躍

受験も〝ゆとり教育世代〟になって随分と様変わりしました。「受験で落ちる」という意味が、どうもひとごとでしかないような感じがします。「このままじゃ落ちるぞ！」と強く言っても「あ、はい」と素直に答えます。最近は何を言ってものれんに腕押し状態なので、「必死にやるとは必ず死ぬと書くんだ！」「死んだ気になって…」「生まれ変わって今日から…」など分かりやすいたとえを出して話しているつもりですが、昨日は中3男子が「う～ん、80歳から？」とつぶやき首をひねりました。確かに人生80年、この子たちは〝ゆとり〟を満喫して生きていく世代なのかもしれません。

冒険心

さて、今年の中3生に、春の入塾面談で「第1志望は北高です」と話してくれた女の子がいます。部活も行事も勉強も〝自分なり〟に両立してきました。そして12月、志望校最終決定の時。塾での学習相談で、模試での実力が合格可能圏まで届いていないことを丁寧に説明しました。本人は「どうしよう」と言い、母親は「この子の行きたい学校へ」と。母親は「行きたい学校は？」と。本人は「北高だけど…」と。私は入試までの取り組みで、逆転合格できるケースと落ちるケースを説明しました。結局、親子で西高に決めました。「甘かった」「もう少しできた」という現実を目の当たりにして、自分自身を納得させる進路選択だったかもしれません。

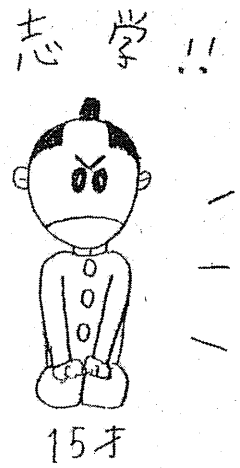
そんなある日、バスケットボールの全国大会強豪校の監督から推薦入試の話が舞い込みました。「全国レベルで自分を試したい！」「でも、西高を目指した気持ちは？」「逃げるのか？」―彼女の中で葛藤があったと思います。毎日のように塾でもご両親を交え相談に乗りました。

数日して進路は決まりました。第1志望は地元の西高。もし不合格なら県外強豪校へ。念のため、地元の私立も受験すると。しかしその後、受験勉強のペースは落ちました。第1志望の西高に受かると県外強豪校で全国大会を目指す夢はかなわなくなるからです。

「本当の気持ちは？」と私は聞き「県外が第1なら、まず西高に受かることが君の〝針路〟だ」と話しました。すると本人は「でも学校の先生が県立は蹴れないって…」と板挟みの心境を話してくれました。私は「両方受かったものだけに進路の選択権があるからね」と助言し、塾として西高に合格できるよう指導することを宣言しました。本人は覚悟が決まった表情で「よろしくお願いします」と言いました。

塾には、毎年受験はやってきます。いつも中3の進路選択は、15歳の船出だと思っています。そして、家庭が〝母港〟だと思います。帰る場所がしっかりしていれば、子どもは危険や不成功も覚悟の上で、外で活躍できるものではないでしょうか。いつの世も、子どもの冒険心は親の心配で、子どもの未来は親の希望です。

（畑山篤＝志学塾塾長）



ソフトゲーム

多くの子ども達がゲーム。勉強や運動の不足にされる。そして上手に付き合う特別授業が…。

ベネッセ教育総発センターの第年調査によるとビ画面や端末をたテレビゲーム小学生は81・学生が75・7り、それぞれ増えている。

1月中旬、原市立三和中合学習の時間が招いたゲーム会社カプコン市）の土屋さんが、1年生約に講義を行っが小中学校を開しているだ。

「ゲーム機いる人？」。半が手を挙げ十数時間遊ぶく、中には30子も。

土屋さんは

教育

子どもの安全科学

自分を守る力養おう

4

分を守る力を養うことが大切です。わたしは、それを「安全基礎体力」

から向こう見ずな行動をしがち。安全基礎体力は未熟なので、「知ら

えてあげることです。9～13歳ごろは「共助段階」。行動範囲が

危ない時期ですが、達の輪も広がり、助合うことを学びます積極的に友達や周囲あいさつし、知らな人にあいさつされも、場合によっては